

『いいなづけ  
—17世紀ミラーノ  
の物語—』

一ノ瀬俊和

イタリア古典文学の代表的な作品であるダンテの『神曲』といえ、読んだことはなくても、その名前くらいは聞いたことがあるでしょう。ところが、イタリア近代文学の代表作となると、首をかき上げてしまう人が多いのではないのでしょうか。もしそれをひとつだけ挙げるとすれば、19世紀前半に書かれたマンゾーニの長編小説『いいなづけ』ということになります。マンゾーニは、日本文学でいえば、ちょうど夏目漱石に当たるような非常に人気のある国民作家です。彼の代表作である『いいなづけ』は、イタリアの中学・高校の教科書には必ず載っていて、現代標準イタリア語の規範にもなった作品なのです。

この作品は、副題にもあるよう

に、17世紀のミラーノとその近郊が舞台になっています。コモ湖のほとりにある村レッコの農民の青年レンツォと村娘ルチーアは婚約して、結婚式を挙げようとしています。ルチーアを見初めた領主ドン・ロドリゴがそれを邪魔しようとしてこの長い物語は始まります。若いふたりは、それぞれ村を出ることになり、運命に翻弄されて、さまざまな事件に遭遇し、さまざまな人に出会います。背景には、北イタリアの美しい風景や、当時の歴史的な状況、都会や田舎の庶民の暮らしなどが散りばめられています。いわば、歴史大河ドラマの趣で、ストーリー性も高く、ついつりこまれて読み進むことになっていくでしょう。さてさて、青年たちは結ばれるのでしょうか。みなさん、ぜひ答えを探してください！



請求記号 ●J116-199,200,201  
『いいなづけ —17世紀ミラーノの物語—』上・中・下 A.マンゾーニ著  
平川祐弘訳(河出文庫)

●いちのせとしかず 本学教授(イタリア語)

※ 私のお薦めの一冊

『音楽教育学大綱』  
Grundriß der  
Musikpädagogik  
Sigrid Abel-Struth 著  
山本文茂監修

江崎公子

S.アーベルシュトルルト(1924～1987)はドイツの音楽教育学研究における第一人者である。音楽教育に関わる歴史、方法論、実践記録などさまざまな文献を実に丹念に読み、それらを網羅的に理論的に体系化したシリーズ本を出版した。この『音楽教育学大綱』はそれらの著作の最後を締めくくる「白鳥の歌」でもある。

彼女の文章はドイツにあっても難解だといわれている。この難解な文章の翻訳に39人が約3年以上たずさわった。筆者もその1人であるが、この本の全貌を知りたいという思いが39人もの人をつなぎ止めていたし、呼びかけ人で監訳者の山本文茂の強い意志が完成までこぎつけたのだらうと思われる。筆者のお気に入り箇所を紹介

しよう。  
音楽という実践的行為のなかで、それに関わる知識と理論が何故必要かという設問に対してS.アーベルシュトルルトは以下のように述べている。

音楽授業等の実践に対し、理論ができることは「根拠づけられていない意見と一般化に対して慎重な態度をほぐくむこと」であり「自分の授業で決断を必要とされる場合の判断力を培うこと」であり「個々の事柄を通じて全体の多様性に目をむけること」と述べ、教育実践と理論の果たすべき機能の違いを指摘している。なるほど合点であった。

知と洞察に満ちた788頁の本、現在新刊は入手不可。図書館で借りよう。



請求記号 ●J100-738  
S.アーベルシュトルルト著、  
山本文茂監修『音楽教育学大綱』  
音楽之友社

●えさききみこ 本学准教授(音楽教育学)